

六十九號
蕉風談
一冊
曳尾竜藏

863
2
90

蕉風談

全



国立国会図書館 タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90

ガラス使用

863-90



一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一

わが心はさかづきしるはなほ
あはれなるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる

はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる
はなはたしむるはなはたしむる

一 蕉風小格をもちしは數年の流弊をうけし
は 無格を聞くとおぼゆるやふおぼゆると
せしや無格をもちしは上品なる所なり

蕉風談

蘇室久安述

わいやはし

一 當今唱ふ所の蕉風俳諧小格太嫌等ハ全く
後人の臆念より出るやと云ふものあり
そはそれより俗家小流弊以蕉翁如斯格
哉定免たまひし事跡はふあはる也
一 蕉風小格をもちしは數年の流弊をうけし
は 無格を聞くとおぼゆるやふおぼゆると
せしや無格をもちしは上品なる所なり

蕉風談

=



そは志すははれをさるる

一 うたふはむの枝はもつちり

去來の歳且の脇ちり蕉翁曰去來のふ誤
て歳且の脇をかく作せぬやまはみささ
きれ照や侍るちるまはらひさ
あみのうんおはへへへちち格
つたぐちたぬるあゆると見る事うた
無格の空心よくつれを辨せり

一 蕉風はうたえと連歌やわづらう和歌や

三

詩やふらうらぬ及連歌の附肌や蕉風は
附肌とくやぬるちり連歌と理ふ答へ物
答ふ蕉風と理ふ答るは物ふ答へは唯空々
寂々たるよと句を吐く自然の合感をまは
詩歌みれ事物の理を忘とく自然躰を得る
浅上品やそれ蕉風と詩歌やおぬり
ちるる事事物の理をとり及もて上品の自然
み所とるる儒佛もまこねあうたぬる
白沙先生の詩小

人不能外事々不能外理二障佛所
名吾儒寧有此

一附肌のあつま

うい〜やうら浅みきるむらみら

浅暗よよひとまはるきのう

是とまよふ空々寂々よる句をばさく

つは〜物理物よ〜をばさく

焙煙の炭を〜たは河ぬぬ

脱ひりたさ〜うなをたる小豆うゆ

田

うたらさき〜たや水のけさ物理物の
作らさあ〜

中のまれよふ丁やさ〜

生朝死ひら〜まれを甚よの歩

やま〜ゆ〜やう〜た〜輔

本來曰

生朝のむら〜とさ〜は〜うら

や〜を〜よ〜甚の歩や〜まのふた

脱係小治定〜附過るゆ急小跡の附句も

おのほろろひびくや〜かなるね
う〜け〜る〜無轍の境ふ〜れみらるる
ま〜れそ蕉風ち〜るる

一 蕉風の全躰をい〜

歌ち〜たよもけち〜志〜る哉も〜る
事ち〜蕉風の俳諧文基をた〜と〜く
い〜の〜あやら反古ち〜るる〜
蕉翁の教ち〜たひ事ち〜た〜りのお
〜〜隠逸道心の樂〜みち〜れを人を感動

さ〜お〜ひもあ〜け〜るその詞ち〜めてお
まは〜やらんお〜るるや〜ち〜るるや
ち〜け〜るち〜俳詞雅詞俗詞〜枕詞
や〜ん〜い〜ふよ〜れ〜るにち〜た〜るる
あ〜詩文章の熟字も萬葉の詞もち〜
〜や〜る〜む〜ら〜と〜出〜る〜よ〜い〜
ま〜ち〜るる 日の本ち〜るる〜
ち〜も〜よく通次古人の詞をほ〜ん〜
調詞和平ち〜契るち〜るる〜その詞何れ



あみふらとて習ふやうにまともあはれ
さもねの流うふ蕉風の風い来るを天格
のそねをいやきうねもあはれ
さねも句の上おわらうとらた
いもさうねめを理やけり算やう
一句のたもみうはるうや
故に隠逸道心のたれみやけをうね
又禁忌私格太嫌さうねを
あはれ私知按排やうの侍

是をいふきうねもあはれ
蕉風無格や申はたら空々寂々を養
ふ工夫あはれ

一 あはれ

名月ふらたうねをよ
あはれ
あはれ俳家の作あはれ歌人
作あはれ万葉歌の歌を聞ぬ
あはれ我らの耳あはれ物遠く異邦人の



みやちもなれよく其通辞をたのみけり
も聞得うたし我俳諧も古人をみねし
離れしきもみねたも其角嵐雪太來の今
ふりたるもつれくも其詞よくしめり
侍らぬ今の江戸人の句を京人のわらぬも
あり京人の句を江戸人のしめぬもあはれ
るるしつれなきうたひもよめをせぬは片
言通辞なくしそわらぬもよめをせぬは
片言しつれなき琉球人のうたひもよめを
せぬは片言しつれなき琉球人のうたひもよめ

も聞えしつれ

一ある人曰く野集ふ推しのやをもたま
しつれ似はるるもつれしつれしつれしつれ
あはれ其推しのしつれたもつれしつれしつれ
ひたまたまつれしつれしつれしつれしつれ

わたらしつれしつれしつれしつれしつれ

老のなみしつれしつれしつれしつれ

けしつれしつれしつれしつれしつれしつれ
つれしつれしつれしつれしつれしつれしつれ

まゝに流しつゝあつたき及人そは分あつゝに
しゝその命お應はるゝ不敬ちうりしれ
りあやさきもたつゝ隠逸道心の行ひあ
まや

一幽玄躰を問むとふ答く曰和歌ふ十躰とら
事あや幽玄躰長高躰有心躰纏躰事可然
躰面白躰濃躰見様躰有一節躰鬼挫躰
ちやあれようみねうたよみたる跡より
はけたる名やゝゝゝゝ幽玄躰をと

まんやてよまゝもたおあゝに附肌ゝも
句ひ附うはる附ゝゝゝ附おらけ附ひま
附ちゝゝもみれ空々寂々のあゝゝ附ゝ
名やゝゝ此度ひゝきふ附む句ひふ附んや
ゝゝゝ附るもたおあゝはゝゝゝゝ其以前
と附形十七躰も有ゝやちう今とその形途
蕉翁ゝゝは事まのちゝゝ減ゝ盡ゝゝゝ
物も理もちゝゝゝ空々寂々たるのみ誠ふ船
の棹ちゝゝ如く飛とらゝのあやちゝゝ如く神



静さや岩ふきみの蝶の影
又月やらのも光のあやふれ
のさすや言は方々女位の舞
七夕や秋をゆたむるけり
身ふみく大根の秋の影
あつらひのほろほろ秋の風
人形短きつらふれ
我長さをゆくはかた
もたつと唇をきくあきつら

+

舞のまねおちきゆく
あつらひのほろほろ秋の風
大いせのあやふれ
あつらひのほろほろ秋の風
あつらひのほろほろ秋の風
あつらひのほろほろ秋の風
あつらひのほろほろ秋の風
あつらひのほろほろ秋の風
あつらひのほろほろ秋の風
あつらひのほろほろ秋の風

ふ日月やさやふおはるの軒のま
名月のまのやまのまのまのまのま
枝もまのまのまのまのまのまのま
ゆのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
初はまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
塩鯛のまのまのまのまのまのま
厚のまのまのまのまのまのまのま

悔り人かまのまのまのまのま
背のまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま

一 蕉風無格やう事さうひそまをくおまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま



柄やまらぬまうやまらぬお答へて曰まらぬ
まらぬ捨太嫌ひまらぬまらぬを手柄とあはれ
俳諧天の法格おたふらぬ無格やまらぬ天格を
得るのみまらぬまらぬ今世格おたふらぬ
て天格まらぬまらぬおゆえお無格やまらぬ名附ぬ
るまらぬゆるまらぬ竹ま直くせんゆる強くまらぬ
まらぬまらぬ放てま直くまらぬ如くまらぬ直
まらぬ天格也天格まらぬ最上まらぬ申るまらぬ附
句のまらぬ月まらぬ月の坐花の花の坐おたふらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
春季も三句まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
五句もまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬ四時のまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
猿蓑の序お不変の變をまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
格お願ふまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

出來侍らん

一 公來抄芭蕉談を俳諧のうへに益ある書あり
ややりの事お答へて曰兩部よりも公來宗匠
の日記を見え侍る公來抄書を以て人にお教へ
むと書たまひもねと見えは益あり
やち申しうたふもくふ真とて迷
ひまひき出以事多うけん公來抄芭蕉
談よりも後人の法をたると名やねもを
屋をぬ

一 蕉翁を此道の祖師也その教示おまて
もたまひあれ屋うけやう屋もお答へ
曰甚とく蕉翁その人々お法をき
るたまひゆえお教示の定り公來
あち句毎お念を入れおあひを
凡兆の俳諧もはさうふたのけ也
志をうけやうの屋もやうけ
一定する詞をその要をさる所は無格
本躰をぬ



一いつふきぬ風雅の誠を志るややいんる

答く曰了芥先生備州退身の後此歌よ

は考らよ一野の山此やゆひ

ちうてこ我一終系の色香

秋うたを幸にやよ一ゆ名ふ兩國橋上ゆく

も一先く驚のこ志をき一やいんる

一ひまのあはこや

一丈草法師の曰我問所の俳諧ハ詞の俳諧ふ

あ〜ひ〜ら此俳諧をうやいんる

正秀うさぬ〜その意をやを終る

山とた〜青山雲とた〜白雲や〜答〜

た〜い〜ふ〜い〜る〜ふ〜答〜曰

人〜と〜た〜女〜人〜と〜た〜男

一う終の集ふ第一義とよ〜や〜い〜る〜も〜今〜

俗禪多〜も〜ま〜れ〜や〜い〜る〜何〜の〜事〜を〜や

や〜い〜る〜答〜曰〜達摩中国ふ入〜不立文字

直指人心見性成佛〜い〜る〜のみ故ふ禪家も

禪と〜い〜る〜也六祖〜ら〜よ〜一〜時〜の〜権法〜



持詰頭公案をももろふ縁権法やう事
を志く候へたる話頭おまはれめると見
性ふりたる事をいひまゝその未々も
くのげぬのみさまゝいひまゝ是を
俗禪とも申候なり

一 隔心の俳諧やうのうんやうの事問へ
人ふ答く曰く芭蕉談ふ公來妙事を丁寧
ふまゝへらねぬ花を貴人あまを上客
珍客ともいひ候へ心得をいひ他門を格有

蕉門を格有へ隔心やう他門を交る時
不禮を起心得をいひたるを蕉門の交を
と居たるあき同心を公翁の花定座を
れの法々十七句めお出らやう終へまゝ
ゆゑ實の俳諧のうへに定座をあらはれ
たる我等と他門を窮屈お交る心をい
他門を交り隔心を習ふことなり
一 今の世点取左右合せ多し蕉門もこれ
をいふ事なるやうのうへ人ふ答く曰く蕉翁



蕉翁曰先ゆく地まぐちるをいふは
いよ〜いよ〜いよ〜いよ〜也是まじ調
詞の和平をいふ借二日の月やとたはら
〜詞をまじひ〜また吹らる歎
や〜作をゆる〜後の句をたはら
あまのま〜小地も落ゆ。自然のさ海
をゆるら侍る是小判の詞をたはら
左右言せたるを〜廣き野をたの野蕉風
の減意明らか〜わら〜是を〜

よきを点取も蕉翁文章法師の句評も
わら〜

妻よ〜いよ〜いよ〜

や〜いよ〜いよ〜

妻よ〜いよ〜いよ〜

や蕉翁のたま〜たま〜を見らる〜附
意の〜いよ〜いよ〜詞も和平小情と
まや〜也萬事ふた〜いよ〜いよ〜
〜蕉風のつや〜いよ〜いよ〜



慶應元年冬十月

自跋

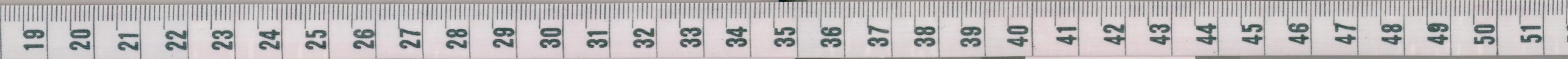
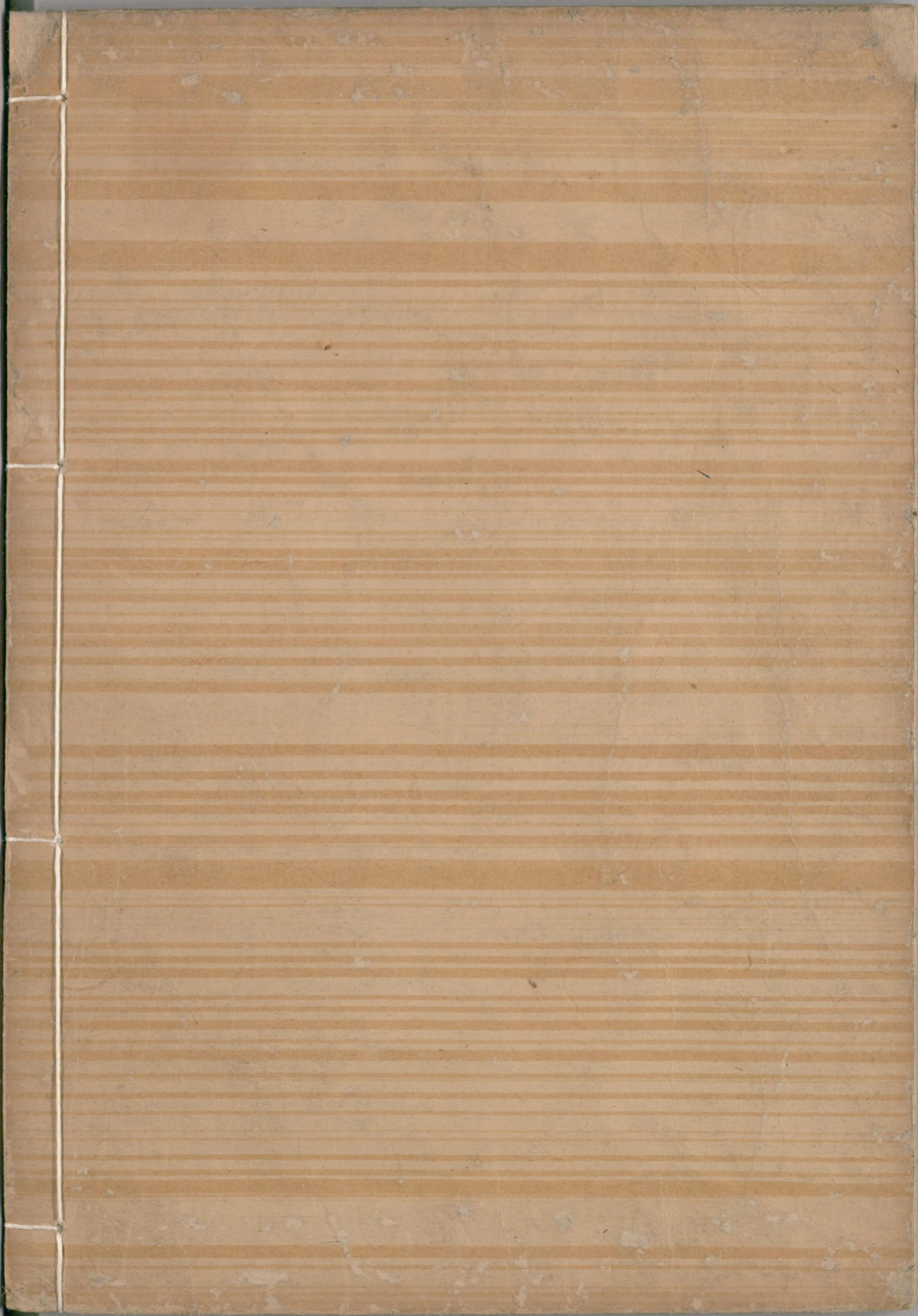
曉の夢をうりて持て返す
時ふも一糸をけしきりて
業門離譜乃謝帆有るあり
よははるるをうりて返す
あはれなるをうりて返す

863
2
90

14152

四張

午あふ心傳ふはあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ



国立国会図書館 タイトル『蕉風談 2巻』 請求記号 863-90

ガラス使用